

## 介護福祉実践領域における「気づき」の文献的研究 ～気づきの生成過程とその構造について～

山 本 満智子

### 1 はじめに（研究動機）

筆者は20年間介護福祉の実践の場に身をおき対人援助専門職に従事していた頃、利用者の生活の様子から「いつもとちがう、ここが違うとはっきりと言語化できないが、何かちがう」と感覚的に利用者の異変の予兆に気づき、重篤回避につながったことがあった。しかし、そうした体験とは別に、「利用者の体調の変化に気づく人と気づかない人がいるのは、なぜだろうか。」と疑問を抱くことも度々あり、「気づき」の重要性を痛感していた。この「気づき」の重要性を認識してから10年近くが経過した現在、筆者は介護福祉教育に携わる中、人材育成の研修等で「気づき」の重要性が多く取り上げられていることを知り、改めて「気づき」に着目することが学術的にも社会的にも意義があることだと認識するようになった。

実際、介護福祉現場の質的向上に向けた取り組みについて政策側を見てみると、2012年に福祉人材確保対策検討委員会から「2025年に向けた介護人材の確保～質と量の好循環に向けた4つの基本的な考え方」が提言されている。ここには、介護人材のさらなる確保には介護人材の「量と質の好循環」が重要であり、介護福祉現場の質的向上には介護福祉職のリーダー育成が急務であるとし、現在、研修が組まれるようになっている。例えば、日本介護福祉士会主催のファーストステップ研修では、ケア領域72時間の中で「ケア場面での気づきと助言」に24時間の研修時間を組み込んだカリキュラムが編成されている。

しかし、こうした研修等では、実践の中で生起されているものを取り上げ「気づき」に関する理解を求めただけにとどまり、「気づき」に関する構造的整理とその教育体系が整っているとは言い難い状況であると考えられる。「気づき」に関して、松沼は「実際は気づきに関する概念や定義があいまいなままであり、それを養成する適切な研修プランが確立されていないのが現状だ」と指摘している（松沼 2005）。実践現場の質的向上や人材育成において重要とされているにもかかわらず、その本質は不明瞭なままであるといえる。

「気づき」が確立されていない要因としては、以下の2点が挙げられよう。

- ① 「気づき」という行為は提供者側の内面的要素であり、言語化されにくい。
- ② 介護福祉実践領域における「気づき」とは介護福祉職が、様々な状況下で思考・判断・行動を連続的、継続的に実践しているなかで生成されているという2つの特徴をもって

いることから、他者へ継承されにくい。

換言すれば、「気づき」とは介護福祉職個人の自己認識、価値観など個人の意識や思考、潜在的な特性や個性が背景にあることが考えられる。このことから、「気づき」の重要性は謳われ続けていても、「気づき」の本質や定義の明確化が困難となっていたと考えられる。

そこで本研究では、介護福祉諸領域における「気づき」の先行研究とその周辺領域の知見を整理することで、「気づき」の生成過程とその有用性に関する知見を導き出すこととした。

以下論を進めるに当たり、本稿では介護福祉職、介護福祉実践領域と表記する。

## 2 介護福祉実践領域における[気づき]の先行研究の概要

今回の研究を行うにあたり、「気づき」をキーワードに論文検索を実施した結果、介護福祉実践領域における「気づき」の重要性の記述がある先行研究はあったが、「気づき」の本質を取り上げた文献はほとんど見受けられなかった。ここでは、数少ない「気づき」に焦点を当てた先行研究を3つ列挙し、その概略を述べる。

中村（2008）の「介護福祉士キャリアアップ誌上セミナー、介護福祉士ファーストステップ研修「ケア場面での気づきと助言」」では、平成18年度介護福祉士会主催の研修会において、「気づき」の生起以前に条件があるとしたうえで、「利用者のなかで何が起きているのかを理解しようとする介護福祉職の姿勢」をあげている。そして、適切な介護のための「気づき」の要素として5項目を示している。

松沼（2005）の「「気づき」を高める研修方法」では、「気づき」に確固たる定義や概念化はないとした上で「気づき」の構造を提示するとともに概念を考察している。

さらに、菊地（2017）は「介護の誇り」において、介護サービスに携わる人に一番求められる能力は「一番近くで気がつく能力」であるとし、「気づく力・気づく心」について述べ、目の前の利用者の暮らしぶりに関心を持つこともスキルであるとまとめている。

以上3人の先行研究について、介護福祉士の研修や認知症専門誌、その他の文献も合わせながらまとめていき、そこに考察を加えていくことにする。

## 3 中村論文における気づきの前提条件

まず、中村（2008）の「介護福祉士キャリアアップ誌上セミナー、介護福祉士ファーストステップ研修「ケア場面での気づきと助言」」を見ていきたい。平成18年度介護福祉士会主催のリーダー研修や介護福祉士ファーストステップ研修において「ケア場面での気づきと助言」について取り上げている。そこでは、「気づき」の前提条件として「利用者のなかで何が起きているのかを理解する」ことを挙げ、また、このことは「気づき」の具現化のための第一課題とも述べている。特に認知症の利用者との関わりの中で、介護福祉職を悩ませる

周辺症状から利用者へ嫌悪感を抱くことや無意識に「理解できない人」「変な人」というレッテルを貼ってしまいがちであると指摘している。また、レッテルを貼ることで、介護福祉職は「あの人は認知症だから暴言を吐いても仕方がない」など無意識に歪んだ「気づき」を持ちやすく、それが利用者個人の価値を低める介護実践行為となっていることも説明している。そして、この認知症の利用者への嫌悪感を回避するためには「その人の問題のある部分を見る視点」から「その人全体を見る視点」へ介護福祉職自身が自分の視点を転換し、介護の場面で利用者のニーズに気がつくことが重要であるとしている。

さらに、中村はニーズに対する「気づき」には、利用者の立場に立ち、本人ができること、できないことを見極める観察が重要であることも明示している。その上で、適切な介護のための「気づき」として以下の5項目を挙げている。ここで、この5項目について概観し、考察を加えてみたい。

- ① 思い込みや決めつけない態度
- ② 知識に基づいた総合視点での観察
- ③ 利用者への関心
- ④ 直観や想像力
- ⑤ 利用者の立場に立った共感の視点

中村の「気づき」は認知症ケアに特化したものとなっており、対人援助全般について述べているものではない。ただ、筆者としては、中村の指摘する5項目は一般的な対人援助における「気づき」の基本的なものと理解している。

①の「思い込みや決めつけない態度」で、中村は認知症ケアの実践において介護福祉職を困惑させる認知症の周辺症状が日常のケアで連続的に起こることにより、介護福祉職は疲労困憊し無意識に嫌悪感を持ってしまうと指摘している。そしてまた、介護福祉職自身が自分の視点を転換する力としての「発想の転換力」による「思い込みや決めつけない態度」が、適切な介護を実践するために必要な「気づき」をもたらすとしている。確かに、中村が指摘した状況が続くことにより、ストレスfulな関係が生まれ、ケアの質に影響をもたらすとも考えられるが、ここでいう「嫌悪感」に介護福祉職自身が「気づき」を得られたのであるならば、それは「自己の否定的側面の創発」であるといえる。さらには、否定的側面に「気づき」、思い込みや決めつけない態度を得られたのであるならば、それは「自己の肯定的側面の創発」であるといえる。そうした「否定的側面の創発」と「肯定的側面の創発」の連続こそが中村のいう「発想の転換力」なのであろう。

次に、②の「知識に基づいた総合視点での観察」についてであるが、これは言葉のとおりであろう。例えば、糖尿病による合併症を理解することで知識が実際のケアに反映されるなどが挙げられる。疾病の基礎知識を踏まえた上で、利用者の健康状態はもちろん心身の状況を把握、観察しさまざまな情報の関連付けをすることで、利用者の生活の全体を把握することが可能となる。

最後に、③④⑤の「利用者への関心」「直観や想像力」「利用者の立場に立った共感の視点」について、中村は関心、直観、共感等の感情体験がどこから生じているのか概念化したものを過去・現在・未来につなげるとしている。この介護福祉職が抱いた関心、直観、共感等は、主観的要素といえる。主観的要素である感情体験を介護福祉職自身が一旦自分の中で受けとめ、思考の整理を行いつつ客観的思考に変換することで、新たなケアへ導くことが可能となろう。こうした人間が持つ感情体験を活かすことが専門職の基本的態度の育成に重要な要素と考えられる。

以上の他、中村は適切な介護のための「気づき」を得るために5つの要素が日常的に行われることが重要であるとし、ケアのなかで活用され、常に点検する方法としてDCM(Dementia Care Mapping) 認知症ケアマッピングというツールを紹介している。認知症ケアマッピングは、イギリスブラッド大学認知症ケアグループが開発したツールで実際のケアサービスを観て、それをケアスタッフにフィードバックし、スタッフとともに改善の糸口を見つける観察式評価方法である。DCMの背景にある思想は、キッドウッドが提唱したパーソン・センタード・ケアである。このツールを活用することで、利用者の状態を適切に観察することが可能になることや介護福祉職の関わり方によって利用者の状態がどのように変化したかが可視化できるとしている。

#### 4 松沼論文における気づきの構造

次に松沼(2005)の「「気づき」を高める研修方法」を取り上げる。松沼は、「気づき」には確固たる定義はないとした上で、「気づき」の概念を考察し次のような定義を仮説としている。

「気づきとは、ある体験に遭遇した時に感情体験が生じ、その感情を意識化し、思考を通してその感情がどこから生じているのか概念化すること、またはその概念化されたものを過去・現在・未来に当てはめて適切に見極める一連の過程である。また、それぞれの段階に進むには情報が基となり、感情体験が生じるにはその事象に対して興味・関心を有していることが前提条件となる。」(松沼 2005 51-55)

そして、松沼は「気づき」が生じるには「あれ?!」「どうしたのかな?」「あっそうか!」など遭遇した事象(体験)に対して感情体験が生じるかどうかを鍵となることを、以下のよう論じている。

「感情体験は、その事象に対して『興味・関心』を持つことから生じるものである。その『興味・関心』という感情を意識化し、思考を通して危険を察知した場合は不安感や警戒心を、良い兆候を見たときには驚きや期待感を想起させ、介入が必要と判断した場合は、瞬時に次の段階の思考に移行する。そして、最終的には最適な対応方法について判断し、『気づき』のある行動へと結びつく。さらに、『気づき』の度合いは体験や情報量が多ければ多いほど深ま

るとして、介護福祉職個人の情報量の相違は、意欲、好奇心、実行力、観察力、注意力などを活用し、どれだけ日常業務の中で利用者の情報を得ているかによって左右される」としている。

このように、松沼は体験、感情体験、思考、行動の4つの段階において必要とされる能力があると述べている（表1）。介護福祉実践領域における先行研究では、「気づき」の定義まで踏み込んだ研究がないことから上記の定義は有用といえる。あわせて松沼が提示した「気づき」のレベル学習は、介護職個人の能力にあった研修内容としても活用可能と考えられる。その他、認知症高齢者の援助場面においても、当事者は自らの状況や思いを適切に伝える能力が低下していることから、ケアに直接あたる介護福祉職一人ひとりが利用者の状態や要望を瞬時に把握し、対応できる能力、つまりその場で「気づき」を働かせることが必要であることも述べている。

また、松沼は2004年の認知症ケアの実践研修において、「気づき」の意義と構造をはじめ、「気づき」が必要とされる場面、気づきの育成と学習方法についても提言している。介護福祉職の実践の場面を「介護・業務場面」「ケアプラン・各種計画書・日誌等の作成時」「会議・研修・面接時」の3つのパターンに分け、それぞれの場面で「気づき」の必要性と能力を明確化している（表2）。

表1 気づきのレベルに応じた学習目標と学習方法（松沼 2017）

レベル	学習目標（求められる能力）	学習方法
体験	自己開示・自己表現ができ、他者や事象への関心を高める	実証体験、他者理解 自己覚知、注意力訓練
感情体験	他者の現状や事象の変化を把握し、共感する能力と姿勢を習得する	共感体験、コミュニケーション訓練、価値観交流
思考	多角的に事象を捉え、分析。判断する能力を習得する	思考訓練 プロセスレコード
行動	気づいた内容を適切表現、対処する能力を習得する	表現力訓練 アサーション

表2 気づきの構造と必要な要素 気づきが必要とされる場面と必要な能力（松沼 2017）

	介護・業務場面	ケアプラン・各種計画書	会議・研修・面接時
必要な能力	問題をとらえる能力 状況判断する能力 表現・行動する能力 問題を分析する能力	観察・理解する能力 分析・想像・創造する能力 創造・文章化・伝達する能力 分析・概念化・言語化	自分に置き換える能力 話や意見の理解力 意見の発言力 分析・要約・言語化

まず、1 つ目の「介護・業務場面」では、介護福祉職が介護業務についているときに、その場にいる利用者はもちろん、他の職員、家族など環境や人に対する瞬時の「気づき」が求められることを提示している。2 つ目の「ケアプラン各種計画書」では、「介護・業務場面の気づき」とは異なり、現在の状況を振り返り、過去において観察、把握した情報の分析から導き出す「気づき」の必要性を述べている。3 つ目の「会議・研修・面接時」では、意見交換した際に介護福祉職自身が自分のこととして置き換えて考えることで理解が深まり、新たな「気づき」が得られることを示している。

以上、松沼が示した「気づきが必要とされる場面と必要な能力」を筆者なりに場面別に考察してみたい。

#### ① 介護・業務場面における「気づき」

介護・業務場面において、介護福祉職は、介護を必要としている人に直接介護技術を通して関わりながら展開するという特徴がある。その際、介護技術を行うと同時にその場の状況、実施可能な生活動作、利用者の特徴などを知識や理論、倫理観を踏まえながら適切に捉え実践している。特に認知症ケアにおいては、様々な状況下での適切なケアが求められることから、気づいたことを実践につなげていく能力が必要である。これはその場そのときに求められる能力であることから「即応的能力」ということもできよう。

#### ② ケアプラン・各種計画書作成時における「気づき」

ケアプラン・各種計画書作成時においては、日常的な業務での観察、ケアプランの記載事項や記録等の情報と介護福祉職個人が保持している情報、或いはチーム内で共有している情報等を比較する。その過程において「気づき」が得られる。これは、様々な情報をどのように結びつけていくかが問われる過程でもあり、そこには情報の解釈が重要であることから「解釈的能力」ということもできよう。

#### ③ 会議・研修・面接時における「気づき」

会議・研修・面接時においては、事例研究のように比較的時間が経過しても保持している介護福祉職の保持記憶が可能な情報が、何らかの強い現象やスーパーバイザーからの発問、その他自分を振り返ったことにより閃きのように想起され、その結果「気づき」が導き出される。これは、ケアプラン・各種計画書作成時とは異なり、複数名で互いの「気づき」を共有化させ、多角的に捉えた物事をより具現化していくものであるため、「具現的能力」ということもできよう。

以上のことから、松沼の「気づき」定義を筆者なりに解釈し、試論を記述するのであれば、「気づき」とは「即応的能力」「解釈的能力」「具現的能力」という三層によって成立しているといえる（図1）。層として表現した理由は、即応的能力による「気づき」なしに、解釈的能力を発揮することは難しく、また、即応的能力と解釈的能力による「気づき」なしに、具現的能力を発揮することは難しいと考えたからである。

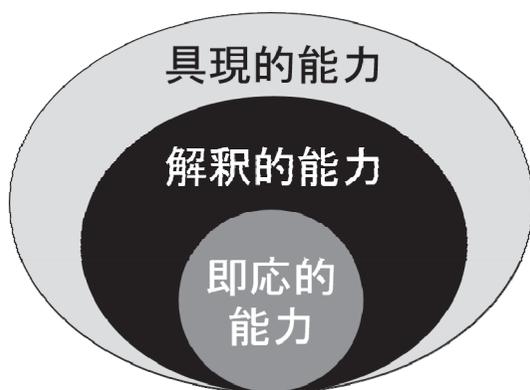


図1 実践場面によって異なる気づきと必要な能力 山本（試論）松沼理論を参考

## 5 菊地論文における気づきのスキル化

次に取り上げる菊地（2017）の「介護の誇り」では、介護福祉施設の事例を挙げ、「気づき」の基礎となるものは想像力であり、それには興味と関心が深く関係していると論じている。ここで、論文の一部を引用したい（菊地 2017 176-177）。

「気づきの基礎となるものは、想像力である。“なぜ”と感じる感性である。そしてそれは、興味と関心に深く関連している。利用者の暮らしに興味と関心を抱かない人の心に、『気づき』は生まれない。介護サービスに携わる人は、目の前の利用者の暮らしぶりに関心を持つこともスキルのうちだと考えてほしい。気づくことの大切さを意識し、気づくための習慣作りをしていかない限り、『気づき』が一過性に終わり、介護支援に結びつかないのである。」

また、菊地は、介護施設の利用者の暮らしに焦点を当て、介護福祉職が実際提供する介護福祉サービスの中で「気づき」の有無がケアに大きく影響すると述べ、次の事例を挙げている他、気づくための習慣作りを日常的ケアに位置づけ、「気づき」がケアに生かされるようにする重要性を謳っている。では、ここで、少し事例を見てみたい。

例えば、普段は排泄の失敗がない利用者が、その日、旧友が施設に来られ、一緒にティータイムを過ごし、いつもより多量の水分を摂取した。この場面に対し、介護福祉職員はその様子を観て、普段と違う過ごし方に「気づき」、心配りをすることで、いつもよりトイレ誘導の間隔を短くした。そのことにより普段の排泄（失敗しない排泄）が可能となった。

もし、介護福祉職がいつもより多量に水分を摂取していたことに気がつかなかったら、普段の排泄に支障をきたし、失禁していたかもしれない。この事例は利用者の個別の生活の中の出来事を、介護福祉職員が「気づき」その「気づき」が利用者のケアにつながった事例といえる。

以上、菊池が論じる「気づき」について見てきたが、興味深いのは、人の暮らしに興味を持つこともスキルだとする点である。興味については、次項で論ずることとする。

また、「気づき」の習慣作りが可能となれば、介護の実践現場において「気づき」を導き出す助言者、例えばチームリーダーなど人的環境や介護福祉職のレベルに応じた研修が有用だという点である。

## 6 「気づきの基盤となる「興味」「関心」

前述したように介護福祉士関係の専門書にも「気づき」の記載は多い。例えば、介護福祉士養成テキストの「気づき」の記載例を挙げてみよう。

「介護福祉士は実践を通して生活状況について把握することができます。しかし、観察力や「気づき」の違いで、把握する情報の質と量は変化します。(中略)・・・一番身近にいる介護福祉士だから気づけることがあります。食事は自分で食べているのに歯磨きは全介助を受けているなど・・・」(岩井 2014 203-205)

このケースから考えられることは、心身機能、身体構造に支障がないにもかかわらず、歯磨きを行わないのはなぜか、と関心を向けることから生まれる疑問である。ここに本研究でいう介護福祉職の「気づき」があり、次に利用者の意欲がないのか、認知機能に何らかの問題があるのかという、多角的な「気づき」が展開される。したがって、テキストが述べているように「一番身近にいる介護福祉士だから気づけることがある」と短絡的に結びつけるのは、飛躍的な考え方ではないだろうか。

介護福祉職の「気づき」から導き出された生活行為と生活動作に関する一つひとつの情報と、実際の多角的な「気づき」から導きだされた利用者理解の事前情報が統合化されたとき新たな「気づき」が生起されるとするならば、援助のきっかけを持つ以前に中村がいう「利用者の中で何が起きているのか」という利用者に関心や注意を向け、理解すること、しようとする関心・態度の重要性の記述が必要だと考える。つまり、介護福祉は「人に関心を向けること」が最も重要であり、関心を向けることで考え、「気づき」が生起されるのである。

ここまで、3つの文献ではあるが、介護福祉領域における「気づき」の先行研究を紹介し考察してきた。まず、中村と松沼の「気づき」の先行研究から明らかになったのは、「気づき」には前提条件があるということである。その前提条件について、中村は「介護福祉職の理解しようとする態度の必要性」を挙げている。また、松沼は「日常生活で生じる事象に対して興味・関心を有していること」を挙げ、そのうえで「気づき」の定義と構造を示し、介護福祉職のレベルによって「気づき」のスキルが習得可能となるとしている。

では、松沼の述べる「興味」と「関心」はどのような学習をすることによって抱くことができるのだろうか。一般的に、日々の実践で繰り返されるケアの中で介護福祉職として、「自分は誰に何をやる人なのか」、「その誰かはどのような価値観を持った人なのか、ADL状況は、疾患はどうか」という、人に積極的に関わろうとする能動的態度が「興味」「関心」という感情体験を引き出すと考えられる。そして、「興味」と「関心」を持ち続けることでケアに

関する疑問が生まれ、課題解決思考へとつながる。この部分を構造化することにより「気づき」の基盤である「興味」と「関心」を教育体系に組み込むことができるだろう。

## 7 まとめ（先行研究から明らかになったこと）

本稿では、介護福祉領域における「気づき」に着目し、先行研究からの知見を整理するとともに考察を加える。

先行研究から明確化された「気づき」とは以下の8項目となることを報告する。

- ① 気づきには前提条件がある
- ② 気づきの生起には感情体験が重要である
- ③ 気づきには学びのプロセスがある
- ④ 経験を振り返ることで気づきの生起が可能となる
- ⑤ 気づきの有無には個人差があることから、レベルごとの研修が必要である
- ⑥ 経験の中で生起される気づきは経験の質によって左右されその後の経験にも影響する
- ⑦ 気づきは連続的なものであること
- ⑧ 経験から得られた気づきは、過去・現在・未来に活用できるスキルとなり得る。

また、この8項目に関して批判的な考察を加えるならば、すべての項目が介護福祉領域に限ったことではないということである。対人関係構築における研修や企業における人材育成の「気づき」或いは教育領域における「気づき」と有意な差はみられないのではないだろうか。「気づき」とは日常の生活体験の中で起こる学びの体験ともいえる。よって、上記に示された8項目は、他の対人援助職はもちろん企業における人材育成の「気づき」の一般化と考えられる。「気づき」の一般化から、介護福祉領域における独自性のある「気づき」を探求することで専門職性の明確化につながると考えている。

以上、先行研究から明確化された8項目と松沼が提示した「気づき」が必要とされる介護場面と必要な能力（表2）を参考に筆者なりに考察した①即応的能力②解釈的能力③具現的能力の3項目について介護の実践現場の協力を得ながら実証研究に着手したいと考えている。数十年前までは、可視化が困難だった現象学的研究もテクノロジーの開発、人工知能技術によって実証可能となっている現在、質的研究とテクノロジーによる研究方法なども視野に入れ今後の研究取組みを検討したい。

また、介護福祉職の「気づき」という個人の経験知の集積をすることで「気づき」のデータが可能となれば、段階的な「気づき」の研修や個人のレベルにあった研修も実施可能となり教材も作成できるだろう。

今回、気づきの先行研究に取り組み改めて介護福祉実践現場における「気づき」について

探求することの意義を再認識した。

現在、介護福祉の現場では質的向上はもちろん、人材育成、離職の防止や外国人の就労についてなど課題は山積みである。「気づき」の科学的根拠が実証され、スキル化が可能となり介護福祉現場での習慣作りができる環境が可能となれば、介護福祉職の個人の技術の向上の他、介護福祉サービスの質的向上、さらには介護福祉職のモチベーションにも貢献できると考える。

### 【引用文献・参考文献】

- 1) 岩井恵子（2014）介護福祉士養成テキスト2、介護の基本／介護過程、203-205
- 2) 陣田泰子、山本則子（2017）看護実践において事例が持つ意味とは「看護現場学」の取り組みから、50（5）看護研究
- 3) John Dewey（2004）市村尚久訳、経験と教育、講談社学術文庫
- 4) 菊地雅洋（2017）、介護の誇り、日総研、175-177
- 5) 中村雄二郎（1992）臨床の知とは何か、岩波新書
- 6) 中村裕子（2008）介護福祉士キャリアアップ誌上セミナー、介護福祉士ファースト ステップ 研修「ケア場面での気づきと助言」、ふれあいケア
- 7) 中山芳一（2015）コミュニケーション実践入門、かもがわ出版
- 8) 城戸隆、高玉圭樹（2013）パーソナルデータの基づく気づきの創発にあたって、人工知能学会誌、28(6)
- 9) 杉山郁子（2014）「今ここ」を生きる人間関係、ナカニシヤ出版
- 10) 田村由美、池西悦子（2017）看護の教育・実践に活かすリフレクション 豊かな看護を開く鍵、南江堂
- 11) 松沼記代（2005）「気づき」を高める研修方法、季刊認知症介護 19(1)
- 12) 松沼記代（2017）高齢者施設の介護人材育成テキスト、中央法規、34-39
- 13) 山口一郎（2001）現象学ことはじめ 日常生活にめざめること、日本評論社
- 14) 生方薫（2007）気づきのカウンセリング、クレイヴ出版事業部
- 15) 厚生労働省（2014）福祉人材確保対策検討会における議論の取りまとめ  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000062069.html>